

若い人材の育成 何より必要

ながひろ 永廣 しんじ 信治さん

徳島大病院長に就く



「医療は医師一人できち、集中力が続かない障害
るものではない。病院運営が残った。未だの防止や適
も、周囲の医師や看護師ら切な対応ができなかったこ
と連携しなければ良いものどを悔い、「同じような症
にならない」。目尻の下が状に苦しむ人を助けたい」
った柔らかな表情の中にと思った。
心の強さがのぞく。病院運1997年に徳島大医学
部教授に就いた後は、脳卒
営のあるべき姿を、信念を中センターの開設に尽力
持って言葉にする。し、患者の社会復帰を支援
大学病院を取り巻く環境してきた。高次脳機能障害
は厳しい。国からの大学運に苦しむ患者やその家族
営費交付金は減り、新たなと、自治体やリハビリ施設
収入源の確保に迫られていとを結ぶネットワークも整
る。さらに人員の不足かえた。

ら、大学病院が担う地域への医師派遣機能が弱まって
の医師派遣機能が弱まって
いるとの指摘もある。
課題の解決には、若い人
材の育成が何より必要だと
説く。医学部卒業後の臨床
研修の充実や、近隣病院と
連携した若い医療者同士の
交流を目標に掲げ、「病院
の活力を上げることが、レ
ベルの高い医療の提供につ
ながるはず」と話す。

専門とする脳神経外科学
を志したきっかけは、中学
3年時にさかのぼる。所属
していた柔道部の後輩が高
校生との練習中に頭を打
ち、集中力が続かない障害
が残った。未だの防止や適
切な対応ができなかったこ
とを悔い、「同じような症
状に苦しむ人を助けたい」
と思った。
1997年に徳島大医学
部教授に就いた後は、脳卒
中センターの開設に尽力
し、患者の社会復帰を支援
してきた。高次脳機能障害
に苦しむ患者やその家族
と、自治体やリハビリ施設
とを結ぶネットワークも整
えた。

モットーは、柔道の創始
者である嘉納治五郎の言葉
「精力善用、自他共栄」。
自分の力を最大限に生か
し、自分も他人も共に進歩
することを目指す。病院運
営にも通じる言葉で、「『自
分なんて』と思わないでほ
しい。一人一人の頑張りが
患者や同僚のためになる」
と言う。

3人の子どもは独立し、
徳島市上八万町西山で妻良
子さん(64)と2人暮らし。
熊本市出身。64歳。
(吉松美和子)

